

思考を奪うテレビ

確信犯？シングルの会：
「健康管理」についてのトーク
(1994.7.24)のなかから抜粋

吉田：人間の体って、細胞とか、いろいろの組織あるわけやから、普段使わんところを、できるだけ動かすことやね、ストレッチみたいなことをやってね。こういう普段の暮らしというのは、姿勢も悪いし…。だから、逆立ちすることとか、ちょっと体を反らせることとかかな。

でも、ほんと、体は、普段使うところが少なすぎる。

岡本：一番使てへんのは、頭や。

吉田：頭も、使わなかったら、さびる。僕ね、コマーシャルを批評するというか、性別役割という視点からコマーシャルをキャッチするという仕事を84年からやっているでしょう。だから、ずーっとコマーシャル見てる。それで、テレビ見てると、明らかに、「馬鹿」になる。

岡本：それで、テレビ見すぎて胃潰瘍になった？

吉田：胃潰瘍は昔からなってるんやけどね。テレビ見てると、何ができなくなるかという、集中力がなくなる。

昔は、原稿書くのに、書き出すと、もう、4、5時間机にへばりついて、1時間に400字詰め原稿用紙に2枚くらい、バーッと書いてた。テレビを見だす直前までは。だから、10年前までは、ミニコミでも、30枚ぐらいの原稿を、3、4日でバーッと書いてたんや。ところが、テレビ見だして、気がつく、集中力がなくなってしまってる。原稿書くときも、30分ももたへんやね。だから、今では、1時間に1枚どころか、2、3時間に1枚しかかけへんことがザラやね。

それから、何かに対して立ち止まって物を考えるという癖がなくなる。なぜかと言うと、テレビというのは、情報がどんどん入ってくるからね。考えなくていいわけ。

ジジ：思考停止っていうやつ？

吉田：あなた任せになるわけや。それで、結構、情報は入ってくるわけでしょ。だから、1年ぐらいテレビを見るのやめないと、思考というものは戻ってこないわ。

このなかにはテレビ見ている人は少ないと思うけど。頭も自分で使わな、さびる。人任せにしたらかん。

西尾：面倒臭くなってくる、考えるのが。

吉田：テレビは、見るときに、考えてへんからな。新聞とか本だったら、立ち止まって考えられる

けど。

西尾：というかねえ、現実を考える、というのが面倒臭なってくる、かなという気がする。アバウトになっちゃう。

吉田：集中力が無くなる。

西尾：テレビでやってることがアバウトすぎるからかも知れへんけどね。

藤野：現実を無くすかも知れんね、テレビというのは。

吉田：うん、現実を奪うといのはあるみたいやね、テレビというのはね。

藤野：今のこの感じがテレビっぽくなかったら、本当じゃないと思うようになる。

吉田：自分の体験が無くなり、疑似体験ばかり繰り返してしまうんや。だから、テレビで見たことを、すべて自分で経験したかのように錯覚してしまうんや。

西尾：テレビのなかのほう为本物に感じてしまう、ということやろ？

ポン：テレビに映らな信用できへん、とか言う人もいてるわな。

西尾：俺の場合は、テレビを、あんまり信用せんと見てるけどな。そやけど、やっぱり、侵されてる面はあるな。気づけてても、何か、もう、「あっ、テレビのなかで言うてること、そのまま吐き出してる」ということは、なきにしもあらずやな。

藤野：疲れちゃうとね、本とか読む気なくなっちゃうけど、テレビ見れるというのは、やはり、頭使わなくていいんやろね。

吉田：考えなくていい。

西尾：本なんて読んでたら、すぐ眠たなるけどな。

藤野：映画見たら、僕、寝てしまってる。

ジジ：テレビ見てて、疲れませんか？

西尾：グッタリするな。

ジジ：ええ。眠くなる。

吉田：ダラダラと見てるからや。

ポン：自分の時間取られるような気がすんねん、テレビ見てたら。テレビって、瞬間だけ見ても分からへんやろ。ずーっと見てなあかんやん、15分なり。

ジジ：だから疲れるんかなあ？

西尾：蓄積されへんね、テレビってのは。

ジジ：右から左にって感じで…。

西尾：抜けるわ、ほんと。